

# 端境期を恐れない作付け (春編)

安定した周年出荷を可能にするための

# 端境期とは

- 野菜の栽培を周年で考えたときに、春夏、秋冬の二期に区別すると、その切り替えの時に生まれる野菜の収穫が減る期間。
- 主に4～5月の春の端境期、9～10月の秋の端境期がある。
- 地域によってなのか、特に春の端境期で野菜セットを休みにする提携がある。

# 基本理念

- 露地野菜、自家採種
- 購入資材に頼らず、自然に即して周年収穫できる農業を模索
- どこで労力を削れるかを考える。育苗なのか直播なのか。
- 商品としてではなく食料としての野菜を考えると、逆に多様な形での出荷形態が思いつく。有機農業の格言「間引き菜から董立ちまで」を実現

# クレオール式有機農業からの提案

- 前提：宇都宮市平出町では野菜の冬越しは容易な方
- 機械は、トラクター28馬力、管理機4馬力、刈払機26cc
- オール露地野菜（ハウスを持たない農業）、無施肥、自家採種
- 年明けからべた掛けとトンネルでハウス分をカバー
- 冬場は踏込温床（2～3畳分）で2月初旬から4月頃まで利用。発芽が安定したら露地にてトンネルで防寒。
- 人参で黒マルチを、ネギと玉ねぎの育苗に太陽熱マルチを利用。

市場や慣行を一旦忘れ、できる限り**自然暦**を大切に

# 目次

- キャベ・ブロ系
- ホーム玉ねぎ
- すじ播きコールラビ
- 大根のリレー
- かき菜
- 菜花
- 二期作じゃがいも
- 2月半ばの露地まきレタス
- 夏ネギ
- トンネルの促成栽培
- その他

# キャベ・ブロッコ系

- 夏の高温期（7～8月）での播種をあきらめ、9月中下旬からできる作付けを考えた。そのため、年内どりのキャベツ、ブロッコリーは諦める。その判断ができるのは、その他で野菜がまかなえるため。冬越しを勧めるのは、収穫期が春の端境期にあたり、年明けの温床で育てた苗と収穫リレーできるから。
- 9月の高温が落ち着く彼岸の頃に播種。セルトレイでも直播でも可能。クレオールでは9月播きはまだ栽培に除草の手間がかかるのでセルトレイ、10月播きから直播にしている。そうすると3～5月を目安に収穫可能。5月末から6月初旬にかけて温床苗が収穫できるようになりリレーする。

# 4月上旬の キャベツ

左が9月セルトレイ播き  
(4/8)

右が10月直播 (4/6) 、  
その後5月収穫





直播、自家採種F2の茎ブロッコリー (3/31)

# ホーム玉ねぎ

- 貯蔵玉ねぎを定植。玉が大きければ分決後の玉も大きくなる。ぶんけつ数は2～4。ホームセンターで売られているのは小粒のみ。どうせなら大きい方がよい。
- 冬場に貯蔵で腐らせてしまうか芽が出て出荷しないなら、9月頃植え替え推奨。冬から4月頃、新玉ねぎが出せるようになるころまで出荷可能。
- もとは採種のための技術を転用したものと思われる。

# 玉ねぎのぶんけつの様子



# すじ播きコールラビ

- 9月のタネまきゴールデンタイム時（9/20～25）、地力のある所ならコールラビのすじ播きオススメ。
- トキタ種苗のカーボロ・ラーパは自家採種可能。繁殖力も強い。
- 菜花も良く、長期収穫できる品種。

# 冬場の様子 (2/17)



# 大根の長期リレー

- 9月上旬まきは10月～3月まで収穫。その際、メインは青首大根（～1月）、白首ダイコン（～3月）とする。クレオールでは、基本全栽培平畝だが、この時期の白首ダイコンの収穫のためすべて畝立て。冬場も極端に寒くないので抜いていけたりはしない。場合によっては年内に肩に被る程度に管理機で土寄せ。
- 年明け、1月中旬：三太郎（2重べた掛け）、2月中旬：三太郎（2重べた掛け）、3月中旬：三太郎（露地）、4月中旬：ニイクラ大根（露地）＋京むらさき、5月初旬：夏つかさ「快」（露地）のリレーで実質10～7月まで連続10カ月収穫。

# かき菜

- のらぼう菜（早生）、ちりめん冬菜（晩生より）、宮内菜（晩生）
- 9 / 10頃セルトレイに播種。高温だと発芽が揃わないことも。早播きは大丈夫なので、9月上旬から気温を見て播種。
- 3月後半からかき菜として収穫。順次菜花も収穫すると5月初旬まで収穫可。こぼれ種は2月頃には収穫可。
- タネは菜種油として採種。国母農園で搾油してもらえる。

# かき菜の一挙三特



# 菜花

- 菜花とはアブラナ科の菜の花のことです。
- 産地の千葉などでは菜花専用の品種が使われますが、有機農業では専用品種にこだわらず、秋冬で育てたアブラナ科の野菜からとれる菜の花をつみます。
- 白菜の菜花は特に美味しく、クレオールでは自家採種したものをすじ播きして、菜花専用には白菜を育てています。
- 端境期の頃は、かき菜の菜花も活躍しますが、アブラナ科の多くは早生種なので、晩生のビタミン菜を入れると菜花も長期収穫が可能です。

# 二期作じゃがいも

- 出島およびニシユタカは九州で育種された二期作のための品種だが、栃木でも栽培可能。
- 9月半ば植え、収穫は霜が降りてから芽が出る頃まで。
- 収穫は必要な時に必要な文だけ収穫。貯蔵の必要なし。しかし、地表に近い芋は寒さで傷む可能性があるため、一度土寄せしておけば安心。暖冬傾向ならその必要もなし。



春先に露地で新じゃが (3/21)



# 2月半ば露地まきレタス

- 品種は、サニーレタス、グリーンリーフレタス、ロメインレタス、レネットほか。
- すじ播き、好光性種子のため覆土なし、雨待ち
- 4月から順次大きくなり始めたものから収穫。董立ち後も、茎をピクルス用にも利用可能。
- 最後は採種までできる。

温床ものより  
先行して収穫  
(4/17)

---



# 夏ねぎの坊主処理

- ネギの周年出荷のために、夏ネギを作付けします。
- 品種はトーホクの「羽緑一本太」かサカタの「春扇」
- 播種は7月、高温期のため太陽熱マルチをして準備。発芽後は、もみ殻をまく、遮光ネットを掛けるなど、表面が乾燥しない工夫が必要。
- 初期のみ少し大変だが、苗がしっかりできれば、生育のほとんどが草の少ない秋～春なので比較的楽。
- 4月後半～5月前半にネギ坊主が立つので真下でカット
- 枝豆とのコンパニオンプランツもできる

# 夏ネギの栽培

---



# トンネルによる促成栽培

- 1月半ばから、べた掛け＋トンネルで、小松菜、カブなど 3月下旬から収穫開始できる作付け。ただし、董立ちしやすく、間引き菜として順次出荷。品種は晩生がオススメ。赤かぶのつがる紅など。
- 3月はトンネルを使えば収穫を早められる。なくとも栽培可能だが、収穫は遅くなる

# 年明け栽培最初の収穫 (3/21)



# その他の野菜

- ゴボウ（4月まで。葉が伸びても当分大丈夫）
- 長芋（4月下旬位まで。次の蔓が出始めたあたりまで）
- フェンネル（自生栽培。4月頃から収穫可能）
- ニンニクの芽（5月出荷可能。芽止めされていない品種）
- ニラ（5月出荷可能、一番目は冬の枯れ草含む）
- エシャレット（らっきょうの早どり。5月から収穫可能）
- グリンピース（5月半ばから収穫）

# まとめ

- 端境期を回避する作付けは、同時に進行する夏野菜の栽培に影響を与えるものと覆われます。クレオール式では、夏野菜の促成栽培を極力控え、より自然暦に沿うわせる形で作付け時期を通常の慣行有機農業より約ひと月近く遅くなっています。
- 例えば、ナス、ピーマンの温床播種は3月に入ってからスタート。トマトは4月冷床で。定植は6月に入ってからとなります。私の感覚では朝晩の冷える5月の定植はまだナス科にとって良いと思われず、現に多くの農家かがマルチなどの資材を使っでの定植が見受けられます。
- 露地、資材なし、を考えていくと必然と思われれます。
- 収穫は、格言「間引き菜から董立ちまで」から導く